

◆「コンチェルト」に乗船 —株式会社 Sevens seas cruiser— 御船印めぐりの旅 神戸港の歴史を訪ねる

一般社団法人日本旅客船協会の公認事業である「御船印めぐりプロジェクト」では、参加会社の船や航路ごとに発行するさまざまな御船印を集めることができる。

御船印とは、神社仏閣めぐりで集められる御朱印の船バージョンで、日本各地の船をめぐる船旅の楽しみをさらに盛り上げるため、プロジェクトに参加する船会社のオリジナルの御船印帳・御船印紙を購入し、旅客船や観光船などに乗船した際、船旅の思い出を彩る記念の押印（スタンプ）をいただくもの。

「コンチェルト」の御船印のデザインは、白亜に輝く「コンチェルト」と、レストラン船では国内最大規模となる「ルミナス神戸2」の2隻の特徴の一つにした船を中央に、外枠には「KOBÉ CRUISE」の文字を飾り、神戸でのクルージングを楽しんでいただきたいとの思いが込められている。

コンチェルトの歴史は、平成5年に大阪港と神戸港を結ぶ大阪湾遊覧クルーズ船「シルフィード」として就航した船が、平成7年1月17日の阪神・淡路大震災での観光客の激減で運営会社が清算され、その後、本船は神戸港の復興のシンボルとして運航を再開することとなり、平成9年7月18日に船名を「コンチェルト」に変更して復活した。

以降、株式会社神戸クルーザーにより運航されていたが、新たに「ルミナス神戸2」を加え、令和2年6月1日から「株式会社 Sevens seas cruiser」が運航を担っている。

コンチェルトに乗船

「コンチェルト」は、神戸ハーバーランドモザイク前から乗船でき、透き通った青い空と海を楽しむ「ランチクルーズ」、午後のひとときを楽しむ「ティークルーズ」、明石海峡大橋に沈む夕日を観る「トワイライトクルーズ」、神戸の夜景を楽しむ「ナイトクルーズ」など、さまざまなクルージングを実施している。

船内では、船名の由来である「コンチェルト」（協奏曲）の演奏を聴きながら、フレンチコースや鉄板焼などの食事が楽しめる。最上階のサンデッキでは、爽やかな潮風と共に海上の風景や神戸の街並みを満喫できる。

現在は、新型コロナウイルス感染症対策として、船内換気に加え、感染症対策ガイドラインに従って、アクリル板の設置や船内のアルコール消毒の徹底、ソーシャルディスタンスとして客席数を減らし、密にならないよう対策を講じている。

乗組員は「お客様の安全を第一に、創意工夫をこらしたサービスの提供を心掛けていますので、ぜひ、ご乗船いただき、船上から神戸の景色を楽しんでいただければ幸いです」と語ってくれた。

神戸港の歴史

平成29年に「神戸開港150年」を迎えた神戸港は、日本を代表する国際貿易港として国民生活や産業基盤を支えており、世界の海運のメインルートの北米、欧州、オセアニア、東南アジア、中国航路などの国際定期航路網で世界各地の港と結ばれているほか、瀬戸内を中心とした西日本の各港とも充実したフェリーや内航船の航路網で結ばれている。

神戸港の歴史を遡れば、古くは「務古水門」「大輪田の泊」と呼ばれていた古くから中国大陸や朝鮮半島の港と交流し、また平安時代には「経ヶ島」の築造を行うなど、国際貿易の拠点として発展してきた。室町時代、江戸時代には「兵庫津」と呼ばれ、鎖国政策下の

江戸時代には、国内交通の要衝として、重要な役割を果たした。

開港後は、人・物・情報が行き交う拠点として、また、国際貿易港として常に最新の設備を整備し、世界を代表する港に発展した。

平成7年1月の阪神・淡路大震災により大きな被害を受けたが、わずか2年間で施設復旧を完了した。平成18年には神戸空港が開港し、神戸は海・空・陸の総合交通体系が確立され人・物・情報の交流拠点づくりを進めている。

「海員だより」